

舞台は江戸時代後期

小諸フィルムコミッション代表 牧野和人氏が語る
小諸城主牧野家九代牧野康哉公の話

種痘を奨励した殿様

〜二万四千人の領民を天然痘から救った〜

はじめに

江戸時代後期は全国的に異常気象・天変地異などで疲弊した世の中であり、公儀（幕府）及び諸侯（諸藩）はその対策のために様々な政策を講じ、民生安定のために努力をしていた。

小諸藩においても同様に厳しい財政難の中、天保3年（1832）9月、小諸牧野家九代の家督を相続し、同年12月に幕末の名君と言われた牧野康哉が登場した。

16歳で若き城主になった康哉は、重臣たちを呼び、領内の状況を詳細に報告させ、自らも領内を巡察した。そして、民力が深く疲弊していることを察知し、回復の志を立てた。それは、子育て、養老、産業振興、農地開墾、学問・武術の奨励、そして地域医療などである。

一 生い立ちと生涯

同姓笠間（栃木県）城主牧野貞幹の二男として文政元年（1818）11月17日、日比谷上屋敷で生まれた。幼名は修橘。幼児から資性明達といわれ、笠間藩中興の英主として「寛政改革」を断行し、藩の再建に取り組んだ祖父貞喜の影響を受けて育った。そして小諸八代牧野康命の養子となった。

その後、日光祭礼奉行・奏者番・若年寄など幕府の重要な地位を勤め、大老井伊直弼のもとで幕政に参与し、直弼の「懐刀」と言われた。

幕府の重要な地位を勤め、領内の改革など激務のなか文久3年（1863）6月13日、江戸上屋敷にて46歳の生涯を閉じた。小諸七五三掛墓地に眠る。

二 種痘の奨励―娘に試植

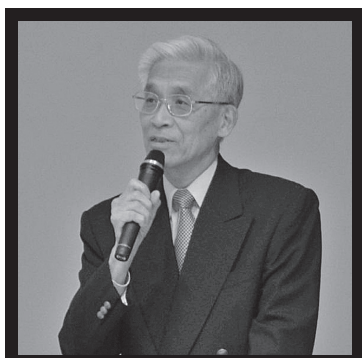
嘉永2年（1849）シーボルトに師として教えを受けた伊東玄朴らによって、日本にもたらされた牛痘（感染症）による種痘法を、藩医の林甫三・川口自仙・佐野静十郎らを医師桑田立斎のもとに派遣し、その術を学ばせた。

当時、領民はもちろん、身分や知識人を問わず種痘を信用していなかった。しかし康哉公は悲惨な天然痘から何とか領民を救いたいと、まず自分の二人の娘に接種してその効果を示し、続いて家臣とその家族に施し、嘉永5年（1852）領内強制種痘を実施し、領民二万四千人（明治4

年迄）に施し天然痘の流行を未然に防止した。当時俳人で教育家でもあった小林葛古はその著書「さきもぐさ」で市町の脇本陣が種痘宿となった

ことなど記している。

尚、天保14年（1843）6月13日祇園神輿渡を見物し、家老宅で休憩。15日は三の門で見物したことが記録にあります。時節柄追記しました。



Profire (プロフィール)

牧野 和人

(小諸フィルムコミッション代表)

仙石秀久の後に、幕末まで160年間小諸城主になった牧野家の分家。小諸城にまつわる講演など数々の舞台で活躍。



種痘奨励額 小諸徴古館所蔵



牧野康哉公遺徳碑 (三の門の左)

3Dで蘇る小諸城

長野大学企業情報部で3DCG技術の開発に取り組む学生と小諸フィルムコミッションが協働で、小諸城をデジタルアーカイブ（記録）する取り組みを行っています。形状・材質・質感など昔の情報に基づいてCG再現する小諸城は、スマートフォンで鑑賞したり、3D眼鏡などを使って自分たち自身がCGの世界に入ったように体験したりすることができます。



小諸高原美術館（白鳥映雪館）にて「小諸城展開催記念シンポジウム」開催 10月8日(土) 午後1時30分～